
東海第二発電所
地盤(敷地周辺及び近傍の地質・地質構造)について
(コメント回答)

平成29年5月15日
日本原子力発電株式会社

コメント及び回答の骨子一覧(敷地周辺及び近傍の地質・地質構造について)

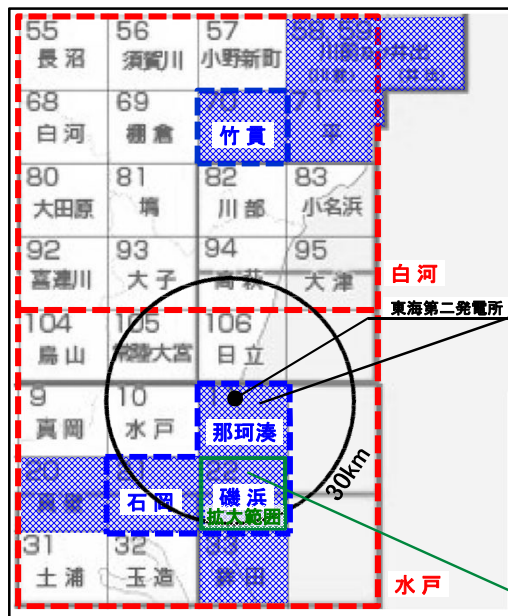
コメント		回答骨子	該当頁
1	潤沼周辺の小断層が表層滑落によるものとした根拠として、正断層の間にある逆断層系についても追記し、説明の充実化を図ること。 (現地調査, 平成29年2月13日)	・ 露頭の再観察を行い、正断層の間にある逆断層系について追記した。	8頁

目 次

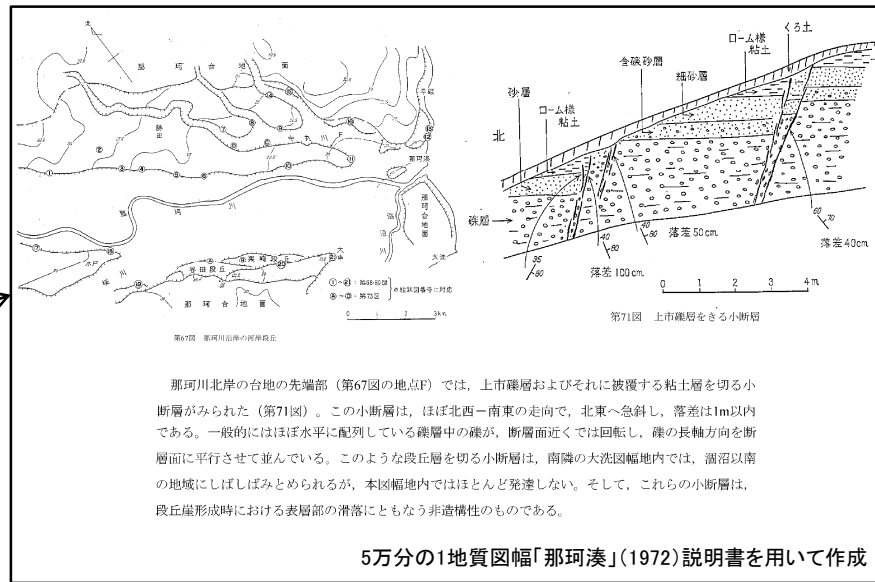
1. 涸沼周辺の小断層について	5
2. 参考文献	11

余白

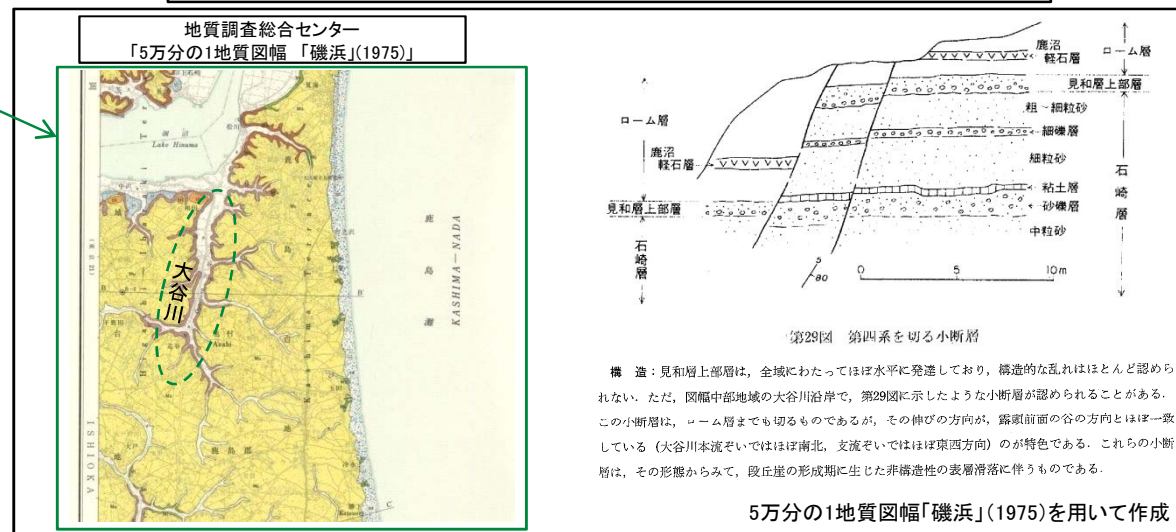
1. 洶沼周辺の小断層について(1/6)



- : 文献調査の対象とした図幅(5万分の1)
- : 文献調査の対象とした図幅(20万分の1)
- : 5万分の1地質図幅が発行されている範囲



5万分の1地質図幅「那珂湊」(1972)説明書を用いて作成

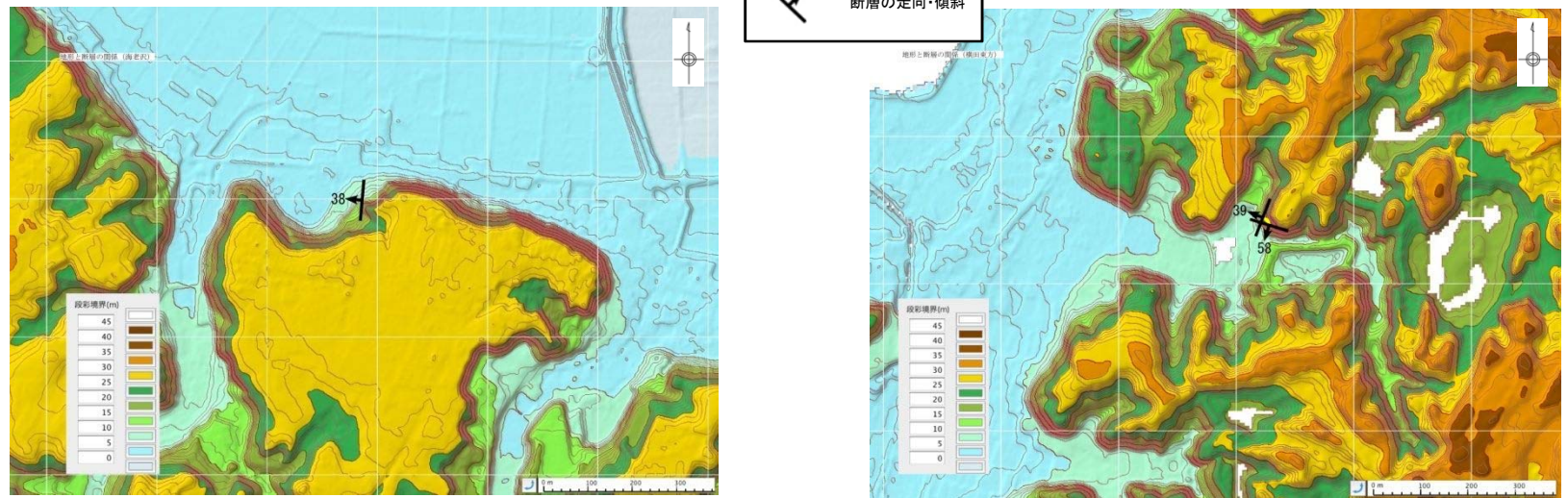
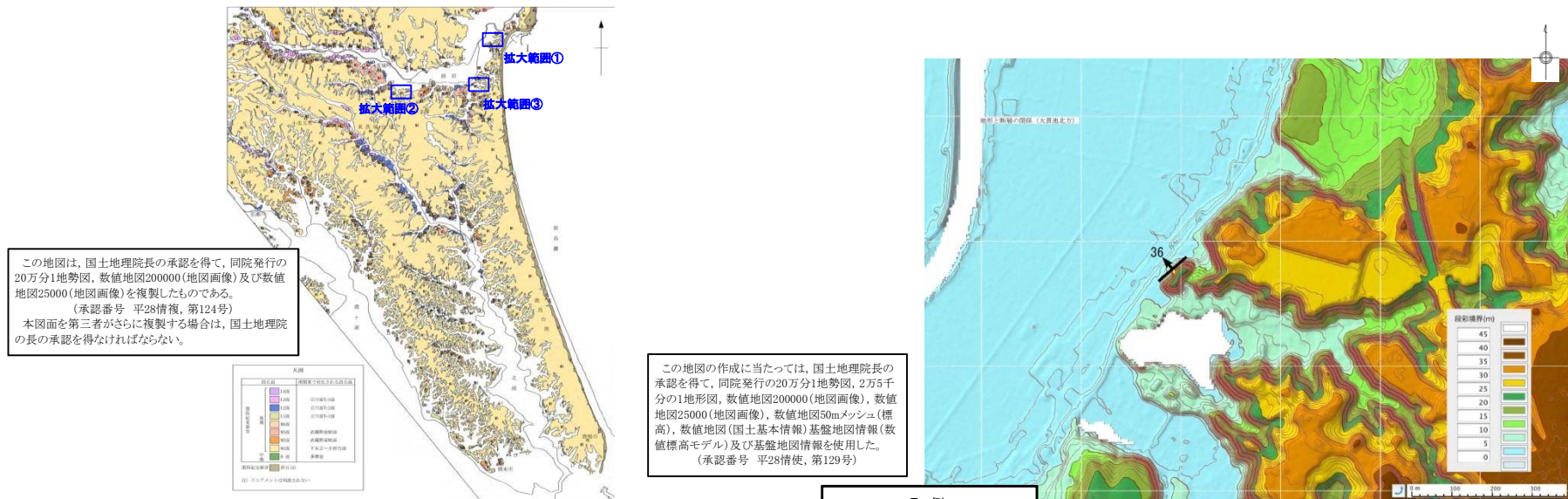


5万分の1地質図幅「磯浜」(1975)を用いて作成

- ・「5万分の1地質図幅「磯浜」(1975)」によると、大谷川沿いに小断層が認められ、小断層の伸びの方向が前面の谷の方向とほぼ一致することから、段丘崖の形成期に生じた非構造的な表層滑落としている。
- ・「5万分の1地質図幅「那珂湊」(1972)」によると、那珂川北岸の台地の先端部に小断層が認められ、段丘崖形成時における表層部の滑落にもなう非構造的なものであるとしている。

1. 涸沼周辺の小断層について(2/6)

図幅に記載されている小断層の性状を確認するため、大谷川周辺の小断層について地表地質調査を行った。



②海老沢地点

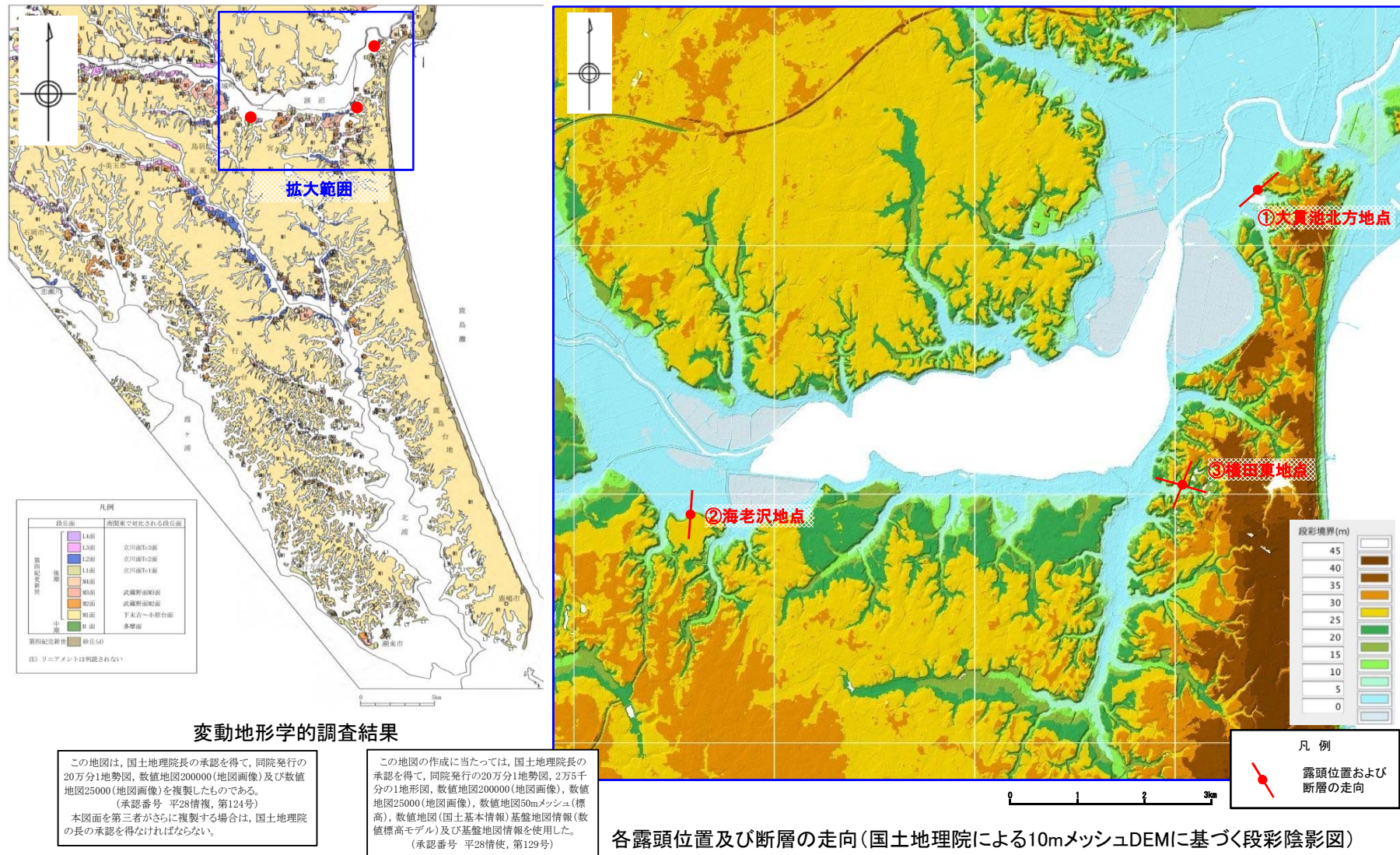
③横田東方地点

各露頭位置及び断層の走向・傾斜(国土地理院による10mメッシュDEMに基づく段彩陰影図)

・段丘崖に認められる断層は、正断層センスであり、走向はいずれも段丘崖の方向と調和的である。

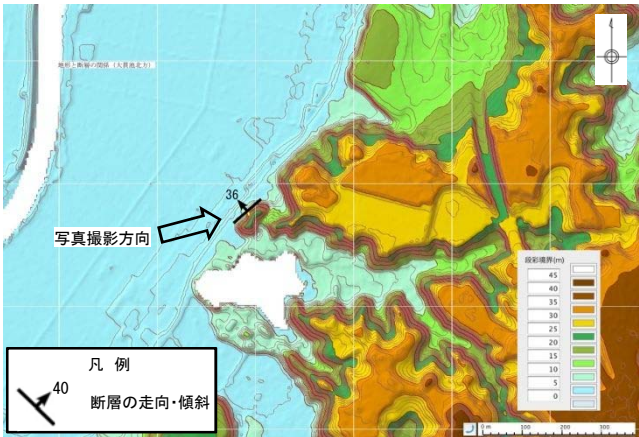
1. 湊沼周辺の小断層について(3/6)

第381回審査会合
資料1-2再掲



- ・断層の延長方向に分布するM1段丘面にリニアメントは判読されない。
- ・変位センスや走向の状況も踏まえると、これらの断層は非構造的な表層滑落と判断される。

1. 涸沼周辺の小断層について(4/6)



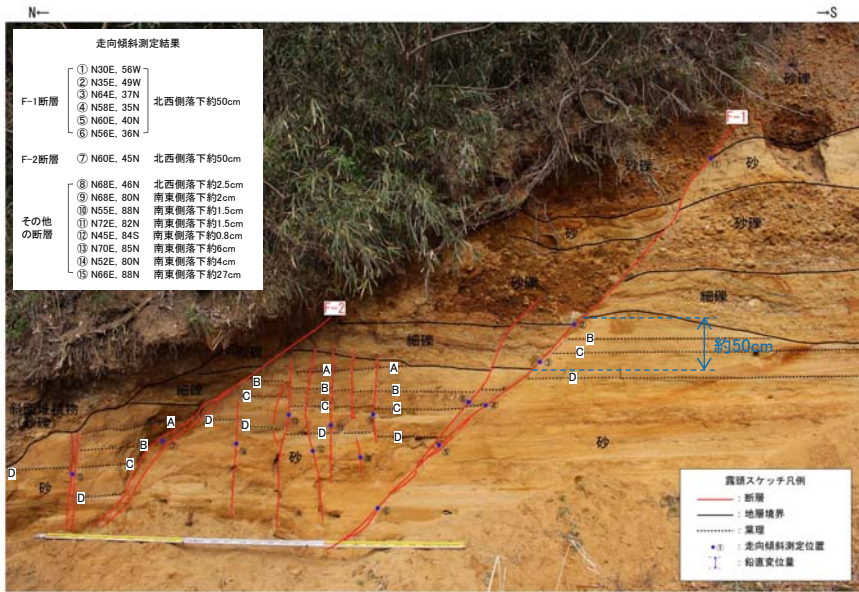
①大貫池北方地点



写真1 露頭全景



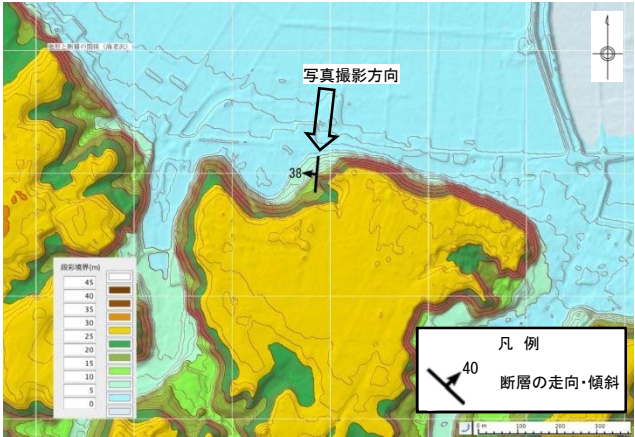
写真2 断層部拡大



露頭スケッチ(断層部)

- ・露頭の北西端に、F-1及びF-2の断層が認められる。断層面の走向は段丘崖と同様概ねNE-SWであり、傾斜は最上部で約56° W、露頭下方に向かって緩くなり、最下部で約36° Nと、円弧状の形態を呈する。
- ・両断層とも見かけの鉛直変位量は約50cmで、北西側落下の正断層である。
- ・また、これらの断層の上盤側には、ほぼ同様な走向で主に高角度傾斜の小断層が多数認められる。これらの小断層は主に南東側落下数cmの変位を示し、幅1mm程度開口している部分もあり、上端、下端はF-1及びF-2断層を越えて連続しない。

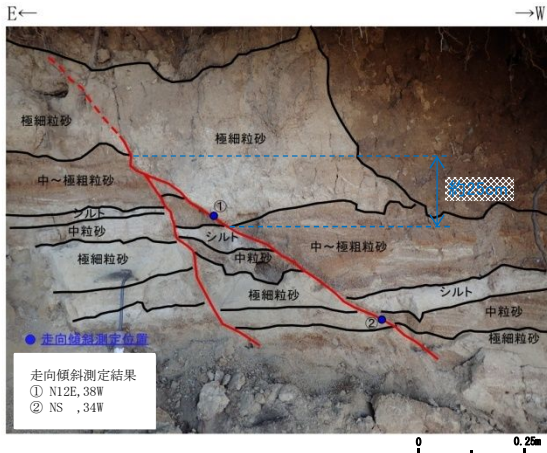
1. 湊沼周辺の小断層について(5/6)



②海老沢地点



写真2 断層部拡大



露頭スケッチ(断層部)

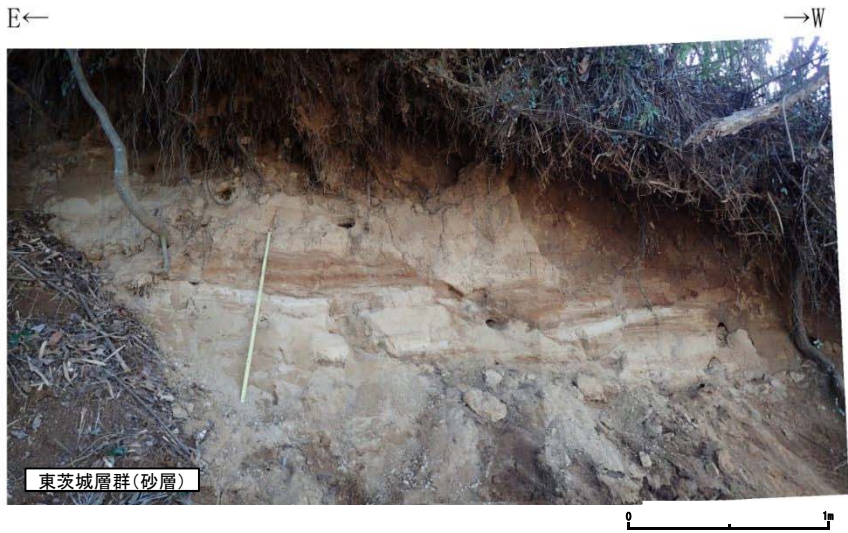


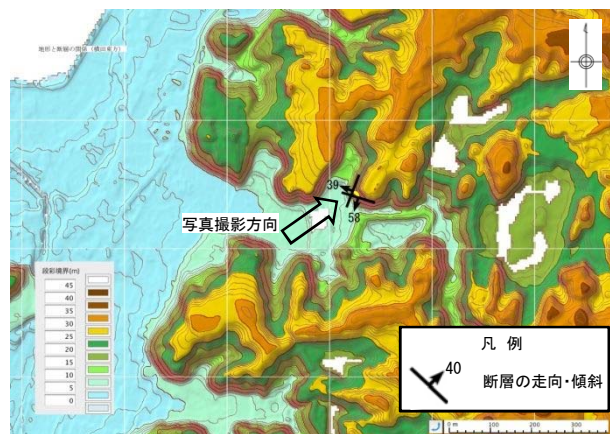
写真1 露頭全景



露頭スケッチ(全景)

- 断層面の走向は段丘崖と同様概ねN-Sであり、傾斜は上部で約38° W、露頭下方に向かって緩くなり、下部で約34° Wと円弧状の形態を呈する。
- 見かけの鉛直変位量は付随する小断層も含めて約25cmで、西側落下の正断層である。

1. 涸沼周辺の小断層について(6/6)



③横田東方地点

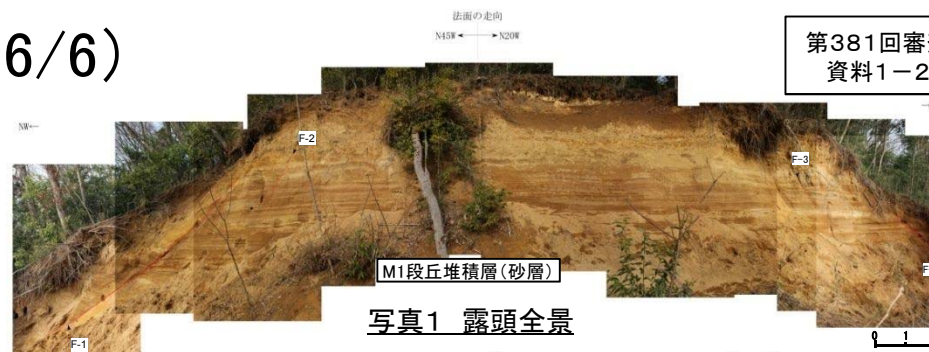
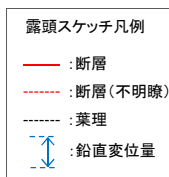
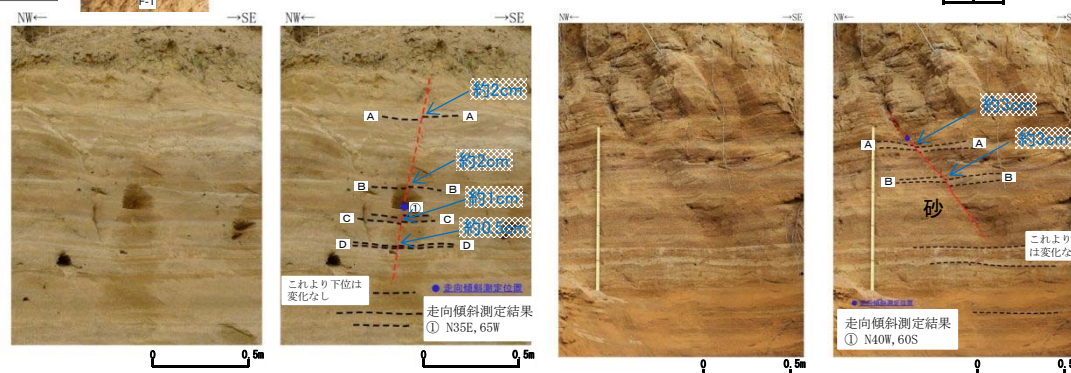
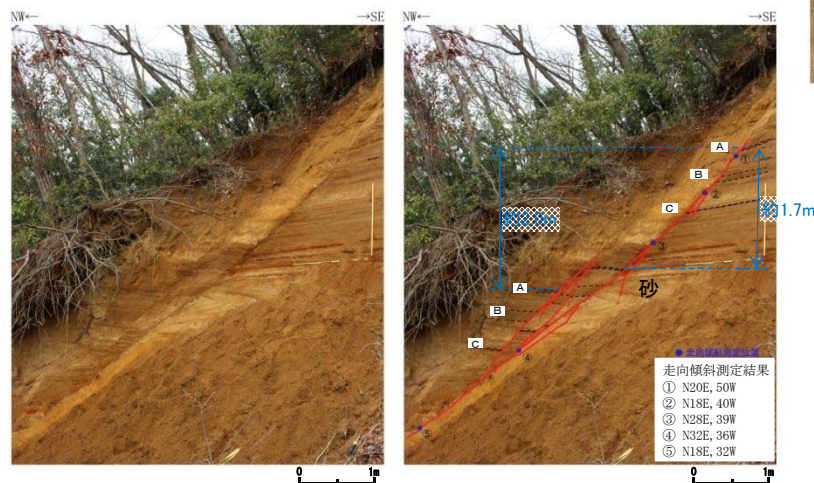


写真1 露頭全景

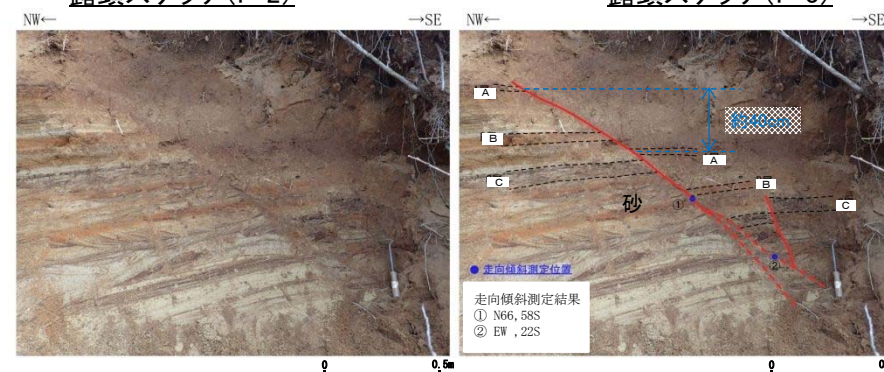


露頭スケッチ (F-2)

露頭スケッチ (F-3)



露頭スケッチ (F-1)



露頭スケッチ (F-4)

- ・露頭の西端に認められるF-1断層の走向は段丘崖の走向と同様概ねNNE-SSWであり、傾斜は最上部で約50° W、露頭下方に向かって緩くなり、最下部で約32° Wと、円弧状の形態を呈する。見かけの鉛直変位量は付随する小断層も含めて約2mで、西側落下の正断層である。
- ・露頭の東端に認められるF-4断層の走向は概ねWNW-ESEであり、傾斜は上部で約58° S、露頭下方に向かって緩くなり、下部で約22° Sと、円弧状の形態を呈する。見かけの鉛直変位量は約40cmで、南側落下の正断層である。
- ・F-2, F-3断層については、見かけの鉛直変位量は約3cm~2cmの小規模な正断層で、断層面は露頭下方には連続しない。

2. 参考文献

- 地質調査所(1972):5万分の1地質図幅「那珂湊」, 地質調査所
- 地質調査所(1975):5万分の1地質図幅「磯浜」, 地質調査所

余白